

プロローグ ―母校からの講演依頼

この春も桜は見ずに散った。
近頃は季節の移ろいが早い。

梅雨真つただ中のある日。

灰色の雲が空を覆い、じめじめとした重たい空気が、より一層、うっとうしさを増していた。いつもより遅く研究室を出てアパートに帰ると、郵便受けに見慣れない茶封筒が届いていた。差出人は、6年間通った母校の恩師だった。懐かしい名前に思わず頬が緩んだ。

「へえー、なつかしいなあ」

僕は、いそいそと封を開けた。

小林くん

ご無沙汰しています。

お身体の調子、いかがですか。今度、あなたの通った学校が

創立100周年を迎えることになりました。小林くんの多方面での

ご活躍、伺っています。

急な依頼ですが、広く社会で頑張っている先輩として君から在校生の後輩たちには是非お話をしてもらいたいと、講演会の課外授業を先生たちと考えています。

近く、関西に帰ってくる予定は、ありませんか？

久々に見る「さんだがくえん三田学園」という文字。懐かしいというよりは、新鮮だった。梅雨のうっとうしい空気が、心なしか少しだけ爽やかになったように感じた。

世間の広さも厳しさも知らぬまま、ただひたすら目の前のことを追い求め、夢中で駆け抜けた中学・高校時代。まだ人生なんて、その意味すらも問わぬ日々。当時の想い出に浸れば、いつも時間を忘れてしまう。だから、あの輝かしい青春の日々を過ごした故郷、母校の恩師からの講演依頼は、とても誇らしとさえ思った。

だけど、その感情とは裏腹に、なぜか気重さを感じて、躊躇ちゆうちゆうする自分もいた。人前で話をするのは苦ではない。これまでの経験から、たとえ聴衆が何千人いても話せる自信はある。なのに…、この重たい気分はなんなのだろう？

もちろん講演自体は引き受けることにしたけれど、様々な思いが錯綜して、日を追うことに胸が苦しくなってきた。

手紙を受け取って、二カ月も過ぎようとしていた。

僕は、お盆休みで帰省したとき、例の講演の打ち合わせのため、母校を訪れた。

講演依頼を受けたときに感じた重たい気分はなかなか拭えず、その気持ちを引きずったまま打ち合わせに臨むことになった。

今、考えても、あのときの思いは複雑だった。もちろん、僕を育ててくれた故郷からの講演依頼があったことは嬉しかったし、誇らしくもあった。しかし一方で、母校の恩師や後輩に、「あの春」以来、自分の身に起きたことをさらけ出すことへの不安もあった。

恩師や後輩たちに、今の、「あるがままの自分」は、どう映るのだろうか？

彼らは、果たして受け入れてくれるだろうか。それとも同情されるのだろうか…。

中高生だったころの僕は、きつと今の僕のように、外見からはわからない困難を抱える障害者と出会っても、なんの興味も理解も示さなかったに違いない。むしろ、本当にそれほどの障害を抱えているのかといった疑いの眼差しすら向けていたかもしれない。僕が日常で抱えているリアルな想い。それは一体どんな言葉で話せば、彼らに伝わると言うのだろうか…。

後輩たちに18歳までの自分を思い重ねていくうち、言い知れない不安とある種の恐怖が胸の中に広がった。

そんなことを考えているうちに、手紙を受け取ってから半年が過ぎるのもあつという間だった。

そして約束の講演1週間前。僕はうつ積する重苦しさを跳ね除けるような思いで、新宿発、神戸行き夜行バスに乗りこんだ。

車窓を流れていくネオンが、蠢うごめく。

あれから、10年の歳月が経とうとしている――